入選

パパ、いつもありがとう

東京都
私立清明学園 六年
中村 朱里

「パパ、くつ下に穴があいてるよ。」
「あけているの。通気性をよくするために。」
「パパ、かれい臭がするよ。」
「インドカレー臭？パパそんなにおいしいにおいがするの？」
「パパ、さっき、おじいちゃんがステテコ姿でウロウロしてたよ。」
「ステテコはいてたんでしょ。何もはいてなかったわけじゃないんでしょ。だったら、よかった。」
「あかり、学校で勉強してきたのに、どうして、家でも勉強しているの？」
「だって宿題だもん。」
「パパ、あかりは勉強が大好きなのかと思ったよ。」
「パパ、仲のいいお友達ってどうしたらできるのかな」
「えっ、お友達がほしいの？パパがいるのに。」

父と私のいつもの会話です。父と話していると、私が予想しているような答えは全く返ってきません。友達のことのような、けっこう悩んでいることでも、笑いにすり変わって返ってきます。解決になっているかというと、そうでもないのだけれど、笑っていると、「まっいいか。そんなこと悩まなくても。」という気分になるから不思議です。食事に行って、注文したものと違うものがでてきたら、「違います。注文したものとかえて下さい。」とお店の人に言うのが普通です。でも、「これが、このお店のおすすめなのかもしれないよ。食べてみよう。」と父は言います。手違いを怒るのではなく、おもしろがろうとするのです。父は「ちょっとした発想の転換だよ。これができると、人生、楽しくなるよ。」と言います。きっと、そうだろうなぁと私も思います。

「パパ、百点とったよ。ホラッ。」
「えー、まるしかないの。パパ、バツも見たかったなぁ。」
「今度ね。」
「パパ。いつも楽しいお返事ありがとう。」